

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-3

「待たせたね。オーダーは？」

「これからいたします」

「私に任せてくれるかな」

辰巳は、さも嬉しそうに真紀に一言断わってから、バーテンダーに手を挙げた。

「お決まりですか」

「ヴァルデスピノのイノセントを、こちらと私に」

「かしこまりました」

冷やされたシェリーの注がれたグラスを軽く合わせて、互いに一口飲んだ。

「……」と真紀は無言で嘆じる。

「この手のドライシェリーは、多分、初めてなんじゃないかな」

辰巳は独り決めして、したり顔で言った。

「お店にも置くようにします」

真紀は即答すると、バーテンダーにボトルを持ってこさせて、携帯電話で写真を撮ってから、興味深げにようすを窺う隣席の二人連れの西洋人に“エクスキューズ、と謝った。

辰巳は真紀の一連のシャープな動作を好ましく思いながら、ボレロ風ジャケットを脱いであらわになった二の腕と胸の膨らみを横眼づかいに、和服姿しか見たことのなかった女の艶めかしさに、年甲斐もなくどこか気持ちが高ぶっていた。

「『こはる』にボトルキープしてもらっている我が社の米焼酎は、この醸造所の甘口シェリー酒の空樽で熟成させていてね。シェリー酒の産地でも、今は製造法が近代化されて、空樽不足は当然で、シングル・モルト・ウイスキーでさえ、空樽熟成が希少価値の時代になってしまった」

男は女の微香に揺らぎながら言った。

「そのお話は、前にも伺ったことがあります、空樽にもこだわりがあるとは存じませんでした」と女は嬉しいことを言ってくれる。

「スペインのアンダルシア地方の田舎町に、なんども出向いてね。先方は十九世紀半ばの創業、こちらは十八世紀半ばの創業。伝統をバックグラウンドにした熱意が伝わったと思うのだが、交渉成立までには苦労があった」

文字通りだったのだが、辰巳は大仰な言い回しをした。

「シンプルでいて、どこか懐かしいような瓶の形に、手漉き和紙にあのイケメン書家作の『米焼酎一風』のラベルと天然コルクの蓋。それに、今、話されたシェリー樽。まさしく辰巳ワールド！」

真紀は満面に婀娜っぽさを浮かべて、ピンポイントの取り持ちをしてくれた。